

# 分子研丸の新しい門出

富宅 喜代一

神戸大学 名誉教授

分子科学研究所は平成22年4月から大峯巖氏を7代目の所長に迎え、分子科学分野の旗頭として新しい歩みを始めています。この機に巻頭言の執筆が回ってきて、いささか戸惑いながらも、私自身約20年前に7年間お世話になって研究の方向を育ませて頂いたものとして、改めて研究所の存在の重要性を再認識しながら、筆を執っています。

すでに多くの諸先輩方により、この巻頭言の中で分子科学研究所の果たしてきた役割と意義、そのあり方について、述べられてきました。特に研究者の育成の面で、創設期の先輩方の深い御見識のもとに作られた仕組みにより大きな成果を生み、非常に多くの研究者を国内の教育研究機関に輩出してきたことは、周知の事実となっています。共同利用機関の役割に加え、研究者の育成は今後も研究所に期待される大きな課題であることは言うまでもありません。

新所長に期待されるさらに重要な課題は、研究所の今後の方向付けと思われれます。創設期に掲げられた上記の課題を十分に果たした分子科学研究所の今後の在り方について、所内外で議論されております。折しも数年内に7人の教授が定年退職されることになっており、研究所が新しく変わりさらに存在感を高める大きなチャンスの時機が到来します。

国内外における存在感をさらに高めるためにこれからの分子研に求められるのは、何よりも先ず求心力です。共同利用機関として今まで以上に所外の方に整った研究環境を提供することも必要であります。しかし、

研究者にとって求心力のもっと大きな源は、やはり新しい分野創出の活気を放つScienceと思えます。分子研に来ないと学べないようなScienceを生み出し、その情報と共同研究を求めて国内外から多くの人が集まる場所であってほしい。このために個人の達成感を満たす研究に留まるのではなく、他分野の研究者をも引き込むような波及性の高い研究が望まれます。各分野で最先端を走る研究も必要ですが、将来、研究所の柱として最先端分野になりうる研究を根っ子から創出することが、研究所の持続した求心力の要となります。このような研究の芽の創出は、しばしば研究者個人のセレンディピティーによる場合が多いと言われていますが、専門家集団の研究所にあっては、芽を生み出す仕組みがあってもよいように思えます。研究の根っ子を見つけるため所内で分野を超えて議論し、所外からの意見を入れる機会も設けるなどして、研究所自体が寿命の長い研究の芽を見極める目を絶えず高めていく必要があるように思えます。また研究所の将来を支える根っ子の研究を、所内で協力し支援して優先的に育てようとする雰囲気作りも必要となります。このような努力の中で研究所の新しい求心力が高まっていくことが望まれます。

以上、研究のナイーブな面を敢えて述べさせて頂きましたが、新所長を迎えて分子研丸のさらなる発展を期待しての言葉とさせていただきます。



ふけ・きよかず

神戸大学名誉教授

1947年大阪府出身。1975年 東京大学大学院理学研究科博士課程修了(理学博士)。1981～1988年 慶応義塾大学理工学部助手及び講師。1988～1995年 分子科学研究所助教授。1995～2010年 神戸大学理学部教授。2001～2010年 神戸大学分子フォトサイエンス研究センター兼任。2004年 東京大学理学系研究科広域理学流動講座教授併任。2001～2006年 分子科学研究所共同研究専門委員会委員。2008年～2012年 分子科学研究所運営会議副議長(2009年運営会議所長候補者選考委員会委員長)